対談

佐藤政権の〝虚像〟と〝実像〟

「国際関係懇談会」の共通の認識は日中国交回復が最も重要な問題だけに少し時間をかけてじっくり煮つめた方がいいということだった。

楠田　實
佐藤前総理首席秘書官

中嶋嶺雄
東京外国語大学助教授

本誌　先日佐藤前総理がノーベル平和賞を受賞されたわけですが、私の個人的な印象では佐藤さんというのは〝虚像〟と〝実像〟とのギャップが比較的大きい政治家だったような気がしております。楠田先生が、十一月号の『文芸春秋』の論文「国際政治の瀬を越えて」の中で言われているところによりますと、中嶋先生は佐藤内閣時代に「国際関係懇談会」という非常にユニークな形である種の外交政策決定に参加されたようですし、また楠田先生は首席秘書官として佐藤さんに非常に近い場所にいらっしゃったわけですから、佐藤さんならびに佐藤政権の〝虚像〟と〝実像〟についていろいろお伺いしたいと思ってお集りいただいたわけです。まず今回の佐藤前総理のノーベル平和賞受賞に対する端的な印象からはじめていただければと思います。

中嶋　賞というものは、もらうべくしても

らったというものと、そうではなくて、その賞が、その人の、業績なり、功績なりの、従来は一般に気づかれなかった側面に光を当てられるという、二つのあり方があると思うんですね。

今度の佐藤さんのノーベル賞の場合はまさに後者でしょうね。つまり今回のノーベル平和賞は佐藤政権、あるいは佐藤前総理のいままでのキャリアを、もう一度国際的なレベルの感覚で考えてみるべきだということを、気づかせたということじゃないですか。だからぼくは日本ではまだ佐藤政権に対する冷静な評価がジャーナリズムなどではほとんどおこなわれないうちに、ノーベル賞に先を越された（笑）という感じを受けたわけです。

ぼくは実はノーベル賞をもらう、もらわないにかかわらず、戦後の日本の政治史の中で、佐藤政権論をきちんとやっておくべきだったと思っていましたからね。もちろん、マイナス面も含めて、当然それなりの評価があってしかるべきです、いい意味でも、悪い意味でも、また、佐藤さんを好きであろうと嫌いであろうと、ともかく佐藤政権が現在の日本をつくったわけですからね。そういう意味でわれわれは自分たちの最も身近な存在、いしは歴史に対する冷静な評価を、きちんとやっていなかった怠慢さに気づかせられたという意味では、今回のノーベル賞は非常に大きな意味があったんじゃないか、というのがぼくの率直な印象なんです。

ジャーナリズムとの一二年半目の出会い

楠田　なるほどねえ。佐藤政権は七年八ヵ月続いたわけですけれども、最後の引退声明をするときに、いわゆる新聞、ジャーナリズムに対する一種の不信感を、率直に佐藤さんが表明した。佐藤政権の幕切れはそういう意味では、ハッピーエンドじゃなかったわけですよ。だから佐藤さんとジャーナリズムとの出会いは、それから二年半目に初めてあったわけです。（笑）

日本の置かれた国際政治上の大きな転換点になった沖縄返還がどういう形でなされたかということをはじめ、佐藤政権そのものについては、いま中嶋さんがおっしゃったように、正しい位置づけがされていない段階で、いきなり佐藤さんがノーベル賞を受賞された。それはまったくそのとおりですね。

吉田茂さんも最後はあと味の悪いやめ方をされて、しばらく沈潜をしてた時期がありますね。そして十年ぐらいたってから、日本の政治史の中で大きく浮かび上がってきた。ちょうどそのころ中嶋先生なんかの世代の、外国で勉強した若い学者が外から日本を見て吉田さんの存在に気がついた。それに十年ぐらいかかったわけですね。

佐藤さんの場合は私の個人的な感触では、その位置づけがなされるのに五年ぐらいはかかるであろうと思っていたんです。それがはからずも二年半目に、外からなされたということだと思うんですね。

中嶋　いま楠田さんが、佐藤さんの幕切れ、ジャーナリズムとの関係においてはアンハッピーに終わったとおっしゃったんですけれど、私は必ずしもそうは思わないです。つまり佐藤さんは時流に乗りたがらなかった人、あるいは乗ることがへただった人ですね。

ところで国際的に見てみますと、時流に乗る政治が、七〇年代の前半は、首脳外交というような形でいわば緊張緩和という波に乗って、全世界をおおいましたね。ところがそれが、今年になってからあちこちで再検討される気運が出てきた。現にブラントの東方外交、カナダのトルードー政権、今回のウォー

ターゲート事件のニクソン、あるいはキッシンジャー外交、それは一時的には非常にもてはやされたんだけれども、そこに大きな落とし穴が、とくに内政面であったんじゃないかということがいわれるようになった。ちょうどその時期にこのノーベル賞が時流に乗らなかった佐藤さんに光を当てた。そういう意味ではむしろ非常にタイミングがよかったですね。ですから私はあのときのテレビだけの幕切れ会見は、必ずしもアンハッピーではなかったと思いますね。

この間もカリフォルニア大学教授のチャルマル・ジョンソン氏と話していましたら、彼がウォーターゲート事件については「これはアメリカ民主主義の復元力を示すものだ」という見方が、日本のマスコミでは、一般的だけれども、はたしてああいう形で大統領が辞任に追いこまれたこと、しかもそれにはジャーナリズム、マスコミの力が非常に大きかったということが、はたしてそれほど高く評価し得ることなのかどうかといいました。

私はそのときにバーナード・クリックというイギリスの政治学者の『イン・ディフェンス・オブ・ポリティックス』という本の中の言葉を思い出しましたね。

それは「政治は全体主義からも、そしてファシズムからも擁護されなければいけない。しかしながら同時に政治はまさに民主主義からも擁護される必要がある」という言葉です。これは、民主主義の政治はつねに大衆の参加を拡大していく。世論をとりこんでいくわけですね。民主主義時代の政治は必然的にそうなる。これに対して本来の政治は、一つの理念なり信念なりをこういう無限の民主主義の拡大から守らなければいけない、という意味だと思うんです。今度のアメリカ大統領の辞任は民主主義が無原則的に拡大していく状況の中で、それに追われて大統領が退陣したということですね。これが政治にとって、はたして手放しで喜べることかどうかということを、チャルマル・ジョンソン氏は言ったんだと思うんです。

またそういう意味では佐藤さんは、そういう民主主義からの政治の擁護という政治家としての条件を、自覚するとしないとにかかわらず、守り通した政治家であったという気がするんですがね。

楠田　ええ。だから政治の基本はあまり古代から変わってないような気がするんです。体制は何度も変化する。政治体制そのものはいろいろ変わっていく。しかしその基本はあまり変わらないのかもしれない。成吉思汗の総理大臣はヤリツソライという人だったと言われますね。実在の人物であるかどうかはわからないんですけれども、蒙古帝国を築いたほんとうの中心の人だといわれている。彼のことばとして残っているものに、「一利を起こすは、一害を除くにしかず、一事を生やすは、一事を減ずるにしかず」というような言葉がありますね。これは何か政治の基本を巧みについているように思いますね。

しかしデモクラシーは民衆、大衆におもねがちだ。だから常に新しい旗つまり新しい利をかかげて、大衆をひきつけていかなきゃならない。それが一種の自転車操業みたいになってしまっていて、ヤリツソライの言った根本になかなか戻れない。そういうところがいまの政治にあるような気がするんですね。政治の基本という問題がそういう意味ではここでもう一回論議されなきゃいけないんじゃないかという気がしますね。

中嶋　ですからそういう意味で佐藤さんのノーベル賞はそれに対する賛否の次元だけでとどまってはいけない問題を、提起したということはいえますね。

それから私は、やはり現在いろいろ批判のある田中政権と佐藤政権を比較せざるを得ませんね。

田中さんはある意味で非常にハッピーな形で登場したんですけれども、それがこういう非常にパラドキシカルな結果になっていくという皮肉な現実からしても佐藤政権を考え直してみるべきではないかという気がするんです。

楠田　人はどうも固定概念で見過ぎるきらいがあるんじゃないですかね。一度でき上がってしまったイメージがなかなか変化しない面がありますね。

私は新聞記者時代、いわゆる佐藤番をやってたわけですよ。当時新聞記者仲間で「淡島に特ダネなし」という言葉があったんですよ。（笑）淡島というのは、佐藤さんが住んでいた世田谷の淡島です。要するに、佐藤から特ダネは取れない。佐藤が右といったら、左と書けばいいとか、佐藤が白と言ったら、黒と書けばいい、というような一種の伝説がありました。

ところが私は佐藤番を担当して、だいぶ特ダネを取ったわけですよ。だからどうしてみんなそんなことを言うかわからなかったんです。一つはそういう人達が「一歩踏み込んでいく」という努力をしてないという面もあったようですね。しかし私は政治家はほかの職業と比べて、とくに変化をするもんだということを強く感じますね。責任のある立場に立てば立つほど、政治家は変化しますね。進歩しますね。何回も大臣をやった人は、一回目より二回目の大臣のときのほうが、いろんな意味で人間的にも進歩している。

たとえば、佐藤さんとか、田中さんとか、あるいは福田さんとか、国の政策決定の中で重要な地位を続けた人は、内面的に非常に変化をする、進歩をするもんだなあという感じを私は持つんです。その変化の度合いを新聞記者が見抜けない面があるんじゃないか、それが一つのいまのジャーナリズムの問題としても、どうもあるようなんですね。

ジャーナリズム、とくにいまの新聞は第一線にいるのは若い人でしかもしょっちゅう変わるでしょう。外国の新聞みたいにたとえば五十歳になっても一線記者という形じゃなくて、ある程度の年になるとデスクや管理職になってみずから取材はしない。第一線の取材は若い人たちが大学卒業してから十年間か、十五年間ぐらい、やるだけなんですよ。しかもしょっちゅう持ち場が変わる。

だから、政治の見方とか、政治家に対する判断があるところでとまってしまって、そこから先へ進まない。そこでで き上がってしまった固定観念が、新聞記者の中に温存されて、継承されていくという気がします。

本誌　それはよくわかりますね。

■アジアから目を
そむけなかった佐藤政権

中嶋　佐藤政権はアジアにかなり目を向けましたね。田中さんは総理になったときの記者会見第一声で、第一に日中国交回復、第二に日米関係の調整、第三に日ソ関係の打開だ、といいました。つまり米、中、ソという三大国を非常に意識して出発した。

そのときに私たまたま、東南アジアを回ってまして、東南アジア諸国のいら立ちと、不安を強く感じました。その中にはある意味でアジアの犠牲の上に高度成長をつづけてきた日本自身が大国意識を持ち始めた、それに対する不安や反発も当然含まれています。ですから日中国交正常化はときの流れとして当然だとしても、そのことが北京・東京枢軸の形成につながるのではないかという不安やいら

立ち、あるいは警戒をアジア諸国に与えたと思うんですね。このことが実は、田中さんが東南アジアへ行かれたときの、反日デモの深層に潜在していた、とも言えるんじゃないかと思うんです。

ところが佐藤政権は日本にとっての戦後処理の大きな懸案として、沖縄返還を手がけながらも、アジアから目をそむけなかった。まず出発点において日韓関係を調整し、そのすぐあと二回にわたって東南アジアを訪問した。これは田中政権のスタートと比べまして、非常に違うところですね。そしてアジア全体の平和と安定という構図の中で、沖縄返還を位置づけた。

沖縄返還は日本にとっては当然のことのように思われるけれども、アジア諸国から見れば日本の膨張主義に見えるはずなんですね、敗戦国が再び領土を奪回したわけですから。しかしこれに対してアジア諸国からはあまり反発がなかった。これは一般にはあまり気づかれてないと思うんですが、佐藤政権がこういうふうに出発にあたって、まず自分の足元をかためようとしたということは注目していいんじゃないでしょうか。

楠田　それは、明らかにそういうことを意識して根回しをして、終わったところでワシントンへ乗り込んだという経過なんですね。

今日は国際関係懇談会の話もしろということなので、ここで少し詳しく申します。

国際関係懇談会は中嶋敏雄さんの提唱で始まったものなんです。戦後の日本の政治には一つの筋道がありました。それは戦争によって生じた諸問題を解決するということから生まれたものです。これが日本の戦後の最大の課題だったわけです。

最初が講和条約、次が日ソ交渉その次が日米関係の再調整という意味をもついわゆる六〇年安保つまり日米安保条約の改定です。それまでは昭和二十七年に締結された条約ですから、いろいろこちら側に不利な点があって、改定が必要になり、岸内閣でそれが行なわれた。それがたまたまあんな大騒動になりましたけれども、実際はあれも必然的にスケジュールとしてしなければならなかったことだったと思うんです。そしてその次が沖縄返還、北方領土返還、日中国交回復という大きな筋道がありました。

その中で日中国交回復はアジアとの諸問題それから日米関係の問題、この問題が二つ前提にあったもんですから、急速に進みえない状況があったわけですね。そして、さらに中国内部の問題があった。だから佐藤内閣としては沖縄返還まではやる自信があった。しかし日中関係正常化については、佐藤内閣では客観情勢がそこまでは進まないかもしれないという一方の見通しがありました。ところで沖縄返還のときに一応政府がやったような形ですけど、実際はかなりいろんな人たちが参加してるわけです。学者、新聞記者をはじめ反対勢力も含めてあらゆる人達が沖縄問題に取り組んだわけですね。

しかも日中問題は国内でも非常に意見が割れていて、明確なビジョンが打ち出せない。相手側の問題もある。そこで少し長期的な観点で勉強会をしたらどうかというんでこれは今日はじめて申しますが、最初に中嶋さんと木村官房長官（当時）と私の三人が話して、それからつぎに中嶋さん、高坂（正堯）さん、山崎（正和）さんの三人にお願いして世話人会をつくって人選を始めた。話が始まってからスタートするまで、四ヵ月ぐらいかかりましたかね。

そしてそれは一内閣の問題じゃないからというので、内閣が変わっても、持続できるような形にしたわけです。現実には、田中さんの内

閣になってから、内閣から、外務省に移管することになりましたけれどもね。またそこから何もかちっとした答えを得ようというんじゃなくて、そういう一つの勉強会をつくって、専門に研究している人たちに集まってもらって議論することによって、分裂している国論を自然に一つにまとめるようなコンセンサスをつくりたいという狙いだったわけです。

できた時に佐藤内閣の延命策とか何とか言われましたけどそんなこととは全然関係なしに、全く国家の問題としてこの問題に取り組んだわけです、そうでしたね。

まだできない「日中国交正常化」の評価

中嶋　その点はまったくそうですね。つまり私自身も中国研究者として、それなりの使命感もありましたし、たまたま香港で一年半ばかり外から日本を見ておりますと、その頃日本では日中問題が急激にクローズアップされてきましたけれども、どうもいわば日中問題を自民党内の政治の手段と考えるような動きが、あっちこっちにあったわけですね。そこで香港から「権力の敗者は中国を目ざす」というエッセイを、『諸君！』に私が連載していたものの中で書き、それが楠田さんのお目にもとまってある意味で国際関係懇談会にもつながったともいえますが確かにそういう党内政治次元の問題として日中問題を考えるべきでないという視野はありましたね。

日中関係はぼくの持論ですけれども、アジアにおける宿命的な異母兄弟で、しかもこれは単に日本だけの問題ではなくて、特にアジアの安定、平和とは非常に重要な関係がある。そういう意味でも長期的な政治課題としてコンセンサスを得ていかないと、一時的な日中国交回復はやろうと思えば、そうむずかしくはないかもしれないが、それよりもまずバックグラウンドを煮詰めることが大事である。しかも実際の政策は、政府や外務省がやるわけですから、われわれは言わばそのバックグラウンドを煮詰めるうえで、何か有効なことができればということを考えたわけです。

私自身、日中国交回復は当初からの主張ですし、ずっとそれを言い続けてきたほうなんですけれども、たまたまあの時期には国内が急激に中国に傾斜し、この間までは全然違う方向にいた人が、急激にバスに乗り始めた。そういう状況の中で日中関係が規定されていいのかどうかという疑問はありましたね。

私はそういう意味で田中政権になってから、日中関係の正常化がああいう形で実現したわけですけど、これの評価はまだできないような気がするんですよ。もう少し時間をかけてみなければわからない。すでに実務協定交渉でもいろいろ問題はありますし、貿易その他の面でもややフェイディングしている。財界の一部には急激に乗り始めたバスから、もう降りようとするふんいきもあります。日中関係はそういうものであっていいかどうかという気持が今でもありますね。

もう一つは、田中さんはこの間も中南米、あるいはアメリカへ行かれて、その後もオーストラリア、ニュージーランド、ビルマを回られて環太平洋外交を展開しておられるのか

もしれないですが、この間もある辛らつな外国人のジャーナリストが「田中さんは自分の一番身近なところに火がついているので、対岸まで出かけて、ようやくヤケドをいやしているんじゃないか」という皮肉をいいましたけれども、やっぱり足元をかためるということ、これは大事だと思うんですね。

佐藤さんの政治は、そういう意味では、ある意味で歯がゆくて、まだるっこかったかもしれないけれども、足元をかためるということを考えていた点は十分評価できるんじゃないでしょうかね。

「足元をかためる」ことの重要さ

楠田　たしかに国際政治では自分の足元をかためないと、いけないという感じはしますね。というのは、日本は国の生き方として、武力を誇示して、左手にコーラン右手に剣という外交をするわけにいかないですからね。そうすると足元のアジアに根をおろすという外交が、必要だと思います。近隣諸国の混乱は、必然的にわが国に波及しますから。

佐藤さんはそういう点では、セオリーに忠実だったなあと思うんです。

しかし沖縄を返還することは、アジアに一種の真空状態ができる可能性がないわけじゃなかったわけですね。その真空状態をつくらないようにするためには、やっぱりアジアの国々が沖縄返還に反対をしないという最低限度の根回しはしておかなきゃいけない。

中嶋　まったくそうですね。それは意外に気づかれてないことですね。いま日本のマスコミなり、ジャーナリズムなりの言わば常識からは、気づかれないような問題をやっておいたということ、これは十分評価していいんじゃないですか。

楠田　六七年九月に台湾に行きまして、ちょうど台湾にわれわれがおりますときに、日本の新聞記者――サイケイの柴田、毎日の江頭、西日本の田中の三氏が中国から追放されているんです。九月十四日でした。それでいろいろと評判がわるかったんです。だけど沖縄は歴史的に見れば、必ずしも大昔から日本の領土だったわけではない。明治になってから、沖縄の統治をめぐって、日清交渉が行われているんですね。

そういう歴史的な経緯を考慮に入れると、たとえ蔣政権のステータスはすでにかなり落ちているとしても、中国の代表者としてわれわれが条約上認めている国家が、それについてクレームをつければ、アメリカだって困ったと思うんですよ。

だからあの台湾訪問は、単にいわゆる右寄りの発想で台湾に行ったんだというとらえ方しか、当時はされなかったんですけど、そういう基本的な、歴史的な、問題についての根回しが、私はあったと思いますね。

佐藤内閣の大きな「遺産」

中嶋　いまのお話と関係しますが、ぼくは、佐藤さん個人もさることながら楠田さんはほんとにその縁の下の力持ちだったわけですけれども、全体としての佐藤アドミニストレーションが日本の戦後政治史において、あまり目立たなかったにもかかわらず、結果的にはかなり評価されるべき業績を残したという、一種の逆説、これがやはり重要だという気がしますね。

その佐藤アドミストレーションが、楠田さんを縁の下の力持ちとして国際関係懇談会はその一つですが、かなりいろいろな形で学者、文化人とパイプを持っていた、これは大きな遺産だったんじゃないんですか。

桶田　それは、佐藤政権というのは、ザ・サトウといいますか、いわば佐藤さんを中心にする一つの流れですが、これを可能にしたのはやっぱり佐藤さんの包容力とか、指導力とか、そういうものだと思うんですよ。自分ですべてをやろうとしない。古い本を読んでいましたら、「一身にしてすべてを兼ねんと欲すれば、大聖、大賢といえども及ばざること多し」という張養浩の言葉がありましたが、この前のリーダーシップについての神谷さんとの対談（本誌十月号）でも触れたかったんですが、佐藤さんにはそういうぐあいに流れの中で幾つかの核をふやしていく、そういう客観情勢をつくっていけるような包容力とでもいうべきものがあって、それ故に私どもも自由自在にいろいろなことができた。

私は新聞記者出身ですから、そういう目で政治を見れば、いままでの国内政治に欠けているものは何かということは気がつくわけで、それを私は私の立場でやったわけです。しかしそういうことができたのは、かかって佐藤さんの包容力のおかげだと思うんですよ。佐藤さんの政治はデバイド・アンド・ルールだと言われましたけど、元さえ締めておけばそれでいいわけで、これだけの複雑な社会を、自分一人で自分の知識だけで動かすのは不可能ですからね。

中嶋　どうも佐藤政権を語ると、田中政権との比較になるわけだけど、やっぱりそこが大きく違いますね。

私はさっきアジアとの関係を重視しなければならないと言ったけど、日本では台湾とか、韓国について触れたがらないふんいきがありますね。しかしながらわれわれにとって台湾、韓国は、最も身近な相手であると同時に、戦争の傷あとが最も赤裸々に残ってるところですし、ある意味では日本はその犠牲の上で、今日の繁栄を築いてきたとも言えるわけでしょう。確かに一方には台湾ロビーとか、韓国ロビーとか、そういう特殊なパイプだけが働き過ぎているという問題もありますけれども、もっと開かれた視野の中で台湾なり、韓国を考えていくように努力する必要があるように思いますね。

私自身もふくめて国際政治学者の間にもキッシンジャー外交は論ずるけれども、中国についてはいろいろ論ずるけれども、台湾や韓

国には行くのもいやだというような、あるいはそういうことに関わると何か自分のキャリアに傷がつくというような気持がどこかにあると思うんですよ。それはある意味ですべての日本人のどこかに残っている体質なんですね。そういう体質が一方にあり、他方には日本人特有のアジア主義のような心情もありますから、そういう二つの心情が非常にまずい屈折した形で出てきているのが、現在の台湾なり、韓国と日本との関係ですね。この点をわれわれはここらでよく考え直してみなくてはいけない。

緊張緩和外交も、それ自身としてはけっこうなことですけれども、国際政治上の緊張というのはある部分が緩和すれば、他の部分にしわよせがいく。例えば大国レベルの緊張緩和が実現すれば、中小国にテンションが集中せざるを得ない。そしてそういう構造の中で日本はある意味でアジアのかじ取りの役割を好むと好まないとにかかわらず担わされているわけですから、緊張緩和のもつ微妙な意味あいをやはり慎重に考えていかなきゃいけない。

楠田　まず明治いらいの舶来尊重主義がある。そしてそれに対して大アジア主義、汎アジア主義がある。岡倉天心の「アジアは一つ」という哲学というかことばなんかはそうですね。しかし梅棹忠夫さんなんかもおっしゃっているようにアジアは民俗学的にみても一つでないようですね。梅棹さんの考え方はだから具体的にこまかくていねいにやらなければいけない。同じアジア人だからというので韓国も中国もインドネシアもタイも一緒くたにしてテイク・オフしない国家つまり発展途上国としてとらえるべきではない。しさいに一つずつ手厚く取扱わなくてはいけないという議論ですね。

しかし現実にはわが国は大国主義的傾向がどうしても強くてアジアに目を向けないことになりがちですね。これはわが国の政界、経済界、言論界を通じてそうですね。

中嶋　それは、日本外交の宿命ですね。つまりいま楠田さんがおっしゃったように、日本とアジアのかかわり合いは歴史的、伝統的に、アジアは一つなりという岡倉天心いらい

甦る大地

最新シベリア紀行——開発と建設に生きる人々

ファーレイ・モウワット著
角邦雄訳

シベリア踏破46,000キロの全貌！

雪と氷に閉ざされた、かつての流刑地——シベリアが、いまソ連の一大資源基地に変貌している。戦後、西欧人作家としてはじめて、極北地帯に入り、ダイヤモンド鉱、金鉱、トナカイ牧場など、徹底的に踏破し、国土開発にとりくむ原住民族の躍動する真の姿を、その生活をともにして、ユーモアあふれるタッチでとらえた異色の紀行ルポ。980円

読売新聞社

のいわば求心化の方向と福沢諭吉の脱亜論から始まった遠心化の方向が交錯していて梅棹さんの文化人類学的なアプローチは、そういう状況のなかで注目すべきものと思いますが、どうもまだ、すっきりした形にはアウフヘーベンされていないですね。

しかも台湾や韓国は、ものすごい日本のオーバー・プレゼンスの中で日常的に日本を常に意識してすべて行動せざるを得ないような状況にある。ここをどういうふうに見ていくかということが、日本外交の一番むずかしいところだと思いますね。むしろキッシンジャーや周恩来と握手して、共同声明をつくったりすることは、やさしいことだと思うんですよ。佐藤さんはどことなくそのへんの問題を、感じていたんじゃないかと思うんですね。またそれを可能にするバランス感覚を、自分の政治哲学の中に、持っていたんじゃないかという気がしますね。

票決と無関係だった「逆重要事項」

楠田　例の国連の逆重要事項問題のとき、結局票決で負けましたね。負けた結果、それを推進した外務省の幹部の中にも、挫折感を持った人がいるんですよ。だけどある意味で票決と無関係なんですね。戦後二十数年台湾と国交を継続してきて、何のセレモニーなしに、もし訣別したとすれば、相当いろんな形の遺恨を残しただろうと思います。あのときの佐藤さんの決断が、非常にマイナーなものであって、歴史的にマイナスだという批判もあったけれども、あれをやらずにもし日中国交回復をしたとしたら、国家としての信義とか何とかという問題よりも、それ以前の問題として失うものがあったであろうことは、私は確実だと思う。

中嶋　その意味では佐藤個人がどう思っていたか、あるいは中国がどういうふうに受けとめたかということとは別に、あれで日中回復への土台を見えないところでつくっていたという客観的評価は少なくとも出てくるわけですよ。

楠田　私は佐藤さんがそういう意図でそうされたということを確信していますがね。

本誌　佐藤さんには日中国交の回復が戦後処理の非常に重要な過程であって、これはぜひやらなければいけないという認識なり信念なりは、はっきりあったわけですか。

楠田　吉田さんの政治哲学とか、政治プログラムの中には、それがはっきりあったわけですね。ですから佐藤さんがそれを継承していることは間違いないわけですよ。だけど客観情勢はなかなかそこまで急には熟さなかったということです。

中嶋　それはもうゴールとしてのそういう認識ははっきりあるわけで、しかし、そのためにやっておかなければいけない手はずがある。その手はずをふむことを、佐藤さんはじっとがまんして、やったんじゃないかという気がするんですよ。

楠田　ですから具体的には自分の時代に雑事といいますか、付帯事項といいますか、そういうことを片づけておくというような気持でしょうね。

十分に生かされなかった「基礎がため」

本誌　そういう佐藤さんがじっとがまんしてやられた基礎がためは田中さんの時代の日中国交正常化に十分生かされたでしょうか。

中嶋　それがぼくはあまり生かされてないと思うんです。つまりそこに、大きな断絶がありましたね。佐藤さんの考えていたこと、あるいはわれわれが国際関係懇談会で考えてい

たことは日中関係の処理はグローバルな視野でつまりいつ共同声明ができるか、というようなことを越えたところで処理しなきゃいけない問題だということだったはずですね。それは田中さんがやった日中国交正常化においては必ずしも十分になされなかったのではないでしょうか。

というのはぼくはこう思うんですよ。吉田書簡は非常に評判が悪かった。しかし吉田さんの発想は、中国問題は中国自身の内政問題であって、いつかは中国人自身が解決すべき問題であるということですね。だから日華平和条約においても、交換公文に「蔣介石政権の領有権は、現在支配している地域あるいは将来支配するであろう地域に限る」という一項があるわけでしょう。

それに確か吉田さんはいま毎日新聞の中にあるアジア調査会の初代の会長を、引き受けたはずですよ。そのときの就任のあいさつの中にも、そういう認識があったように思うんです。そういうことはほとんど見過ごされてきましたね。そういうことを考えると、日本は中国にまだ言うべきことを言ってないと思うんです。

というのはまず日華平和条約は、敗戦国の日本が占領時代から独立国へ移行する状況の中で、当時としては余儀なくされた条約であったわけですからそのことを中国に対して日本はもっと正々堂々と言うべきだと思うんですよ。それをほとんど言ってないですね。それから第二に、最終的にはこの問題は、中国人自身が解決すべき課題だという主張もほとんどたな上げされたまま、日中国交回復がなされてしまった。だから台湾を切るとか、切らないとかいう問題よりも、もっと根本的な問題で、日本はまだまだ中国問題は、ほんとは処理してないんだと思いますね。そういうベースの上に現在の日中関係があるところに、大きな問題があるような気がします。

現在日中関係は確かに表向きはうまくいってるわけですね。しかしながらたとえば中国の立場と日本の立場は、依然として根本的に相いれない。たとえば中国の資源問題に対する態度がそうですね。中国は国際的な相互依存関係を重視するという考え方そのものが、

流動 ● 新刊

保育器の中で愛児失明！涙と怒りの母の記録

弘美の十字架

岡崎千恵 著

B6判上製　二九〇ページ
¥880　〒120

岡崎弘美ちゃんは保育器の中で失明した。病名は〈未熟児網膜症〉。だがこれは病気ではない。医師の不注意による医療被害であった。心ない医師は「命を助けたのだから盲くらい我慢しろ」と言った。母親の千恵さんは、涙をぬぐい怒りに震えて闘いを始めた……

〒105　港区芝愛宕町1-3

超大国の覇権主義だと言い、アラブの石油闘争を大々的に鼓吹している。この立場は日本とまったく相いれないわけですね。これは資源の問題だけでなくて、人口問題、海洋法の問題、食糧問題等さまざまな点で日本と中国は根本的に違う。その違いをいま全部たな上げしている。カムフラージュしているわけですね。それを許しているのは、ひとえに中ソ対立なんですよ。それがあるゆえにすべてたな上げされカムフラージュされているわけです。大きな違いがあるのに、その問題をお互いにつきつけて、日中は対決してないわけですよ。ほんとうは対決した上で初めて日中の友好があり得ると思うんですけれどもね。これはひょっとしたら大きなつけが回ってくるかもしれない。という気がするんですがね。

楠田　国際関係懇談会の共通した認識は、時間をかけたほうがいい、ということでした。もちろんそのときは向こうが佐藤政権と交渉しないという一つの表向きのたてまえ論を言ってた時期だから、背景も安易なムードでなかったということもありますけれどもね。

しかしそれにしてもいま中嶋先生がおっしゃたようなバックグラウンドをいろいろ詰めてみると、将来日本にとって最も重要な問題であるだけに、少し時間をかけてじっくりやったほうがいい、ミニマムでも昭和五十年であろうという認識が出てきたわけです。

それが意外に急進展をしたんですけれども、沖縄返還に比べますと、内容は不消化なまま行われた感じはぬぐいがたいですね。

中嶋　ある意味では、いわばごまかしの上に成り立っている日中関係という気がしますね。だから鄧小平の国連特別総会における演説を読んでみても、日本の立場とのギャップはきわめて大きいですね。にもかかわらずいまの中国にとって日本は中ソ関係からしても重要だから、ごまかしが通用しているんですけどね。

▩各個ばらばらな「平和」への認識

楠田　話は少し変わりますが、佐藤さんのノーベル平和賞受賞の際に私は痛感したことがあるんです。

それは昔から漠然と感じていたことではあるんですけど、平和という問題に対する認識のしかたが、日本人の間で非常に各個ばらばらだということです。平和と佐藤さんがどうしても結びつかないというのが、受賞に反対をする人たちの意見の核心ですね。(笑)しかし国際社会の常識からいっても、平和は努力しなければもたらされないものでしょう。非武装平和論というのはどうも何もしないでじっとしていさえすれば、平和が得られるという考え方のような気がしますね。

だけど実際に平和をもたらすためには、国際社会の、日本以外の国が平和に対してどういう考え方を持っているかということをぬきにして平和を考えてみても、それは国際社会で通用しないと思うんです。やっぱり国際社会で通用している「戦争と平和」という概念から日本なりの考え方を導きださなくてはいけないだろうと思います。

たとえば石油ショックのあと、ヨーロッパの銀行が幾つか倒産したというニュースがありましたね。

それは、アラブ諸国がオイルダラーつまりかなり大量にいままでヨーロッパの銀行に預けていたお金を、短期間にアメリカに移動させたんですね。例の停戦のあと、急速に移動している。それはアメリカが一番強い、安全である、とアラブ諸国が判断したということ

なんですね。これはアラブ諸国が戦争と平和についていかにシビアに考えているかということを示していますね。

朝鮮半島の問題にしても、例えば韓国政府当局がいかにシビアに考えているかということは日本人にはなかなかわからない。

中嶋　確かにおっしゃるように、日本人に最も欠けているのは、平和が相対的なものだという認識ですね。

朝鮮半島における平和、イスラエルやアラブ諸国における平和と日本における平和は、それぞれ違いますね。それを一つの絶対的な理念として観念化しようという平和論が、強すぎますね。

そういう点に気づかせてくれたという意味で、今回の佐藤さんのノーベル平和賞受賞は意味があったのではないでしょうかね。

楠田　佐藤さんは「自由を守り、平和に徹する」ということばをとにかくよく使いましたね。（笑）

てまえみそですがこういう社会ではレピートすることはたいへん大事なことでしょう。自由を守り、平和に徹すると佐藤さんが国会で言うと、野党席が笑うんですよ。（笑）

しかし笑っている人たちがはたして、どうすれば平和を維持できるかということについて、はっきり国民の納得のいくような説明をしたことがあるのかどうか、私はいつも彼らが笑うたびに疑問に思いました。

確かに単独講和か、全面講和かという議論以来、日本における平和という定義は、混乱しています。

しかし、いまわれわれが享受している平和は、混乱のせいで生まれているわけじゃないですね。やはりそれはわれわれが国際社会においてわれわれなりの努力をし、アメリカとの日米安保条約を中心にした安全保障体制を築いてきたからだということは、間違いないと思いますね。

「沖縄返還」は国民がやった

中嶋　そうですね。「平和」は国と国との関係をうまく処理することによってはじめて得られるものなんですから、最もアクチュアルに現実の国際関係との対応を持っていなければならないわけですね。ところがそういうものを全くネグレクトして、言わば平和をある意味での絶対的な価値観と考え、その価値観からどれだけ距離があるか、どれだけずれているかということで現実の平和を論じるという平和論が、日本ではどうもいまでも強いように思います。そういう意味では日本は平和を一番大事にしてきた国民でありながら、平和というものの本質に、意外に気づていないとも言えますね。

楠田　私はそういう意味では日本という国は、非常に利己的だという感じがするんですよ。（笑）国際的に見ますと……。だから日本が沖縄返還を実現し米中接近が実現したことにより、アジアの緊張が少なくともある面で緩和した。ベトナム戦争もある意味で存在の意味を失った。そして地球全体を見ますとそれがどこへ行ったかといいますと、中近東へ行っちゃったわけですよ。だからそういう意味では緊張を転位したわけですよね。そういう面から考えるとノーベル平和賞をもらうにしては多少利己的だなあという感じがしないでもない。（笑）しかし中近東の場合は石油という、先進国にとっての最大のアキレス腱があるから、そこに緊張を転位しても、損得で解決できるという利点はあるかもしれませんがね。（笑）

もし沖縄返還が行われず、しかも米国と中国が対峙したままでいたとすれば、これは損

得で解決できないジャングル戦争が継続し、場合によっては拡大するという状況になるかもしれない。そういうアジアの緊張を沖縄返還と米中接近によってすぱっと抜いてしまったから、緊張が損得の勘定が働く中近東へいったという感じが私はしています。そういう意味では国際的に緊張をなくしたわけではけっしてないが、少くともマイルドにしたとは言える。アジアで起った戦争はどうしても損得で計算できない思想とか、理念とか、イデオロギーの戦争になる以外ないわけですからね。ぼくはノーベル平和賞はそういう意味で考えれば全く当然だと思いますが、しかし世界的、地球的視野で見ると多少利己的だなという感じがしないでもないんですけどね。

中嶋　そういう意味も含めて最初にいったように日本人が意外に気づいていないことに気づかせたという点だけでも佐藤さんを個人的にどう評価するかということを離れて、佐藤さんのノーベル平和賞受賞は意味があると思いますね。それから佐藤さんは党内人事のようなものはうまいが、外交はあまり得意じゃないというような印象を受けますけれども、意外に外交面で大きな業績を残しているのじゃないですかね。そういう意味でもノーベル平和賞は見るべきところを見ていたということにもなるかもしれませんね。

楠田　日本人が気がついていない面は、もう一つあります。沖縄返還は、佐藤がやったから気に食わないという感情があるようですけれど、必ずしも佐藤さんがやったわけじゃないんですよ。日本の戦後史の流れの中で、日本国民自身がそういう方向に意思決定をしたわけですよ。たまたま政治家は正面に立つから、佐藤さんは個人としてもそれに情熱を傾けたし、保守党政権としても、彼がそれを仕上げるまで、八年近く政権を維持することを許したにすぎない。客観的にいえばそれは国民自身がやったことなんですね。

私は佐藤さんがノーベル平和賞を受賞されたのは当然だと思いますけれども、だけどある意味でそれを個人がもらったという風に考えることはおかしいんです。政治はあくまでも民衆の総意ですし、それをしなければならない時代の要請があったわけですから佐藤さん自身がおっしゃっているように国民が受賞したということだと思うんです。

だからそういうふうに、政治を自分のものとして考えない。政治を抽象化して政治というものは抽象的なものであって、自分達国民

の具体的な意思とは無関係だという感じで政治を見ること自体に、一つの大きな自己矛盾、自家撞着があるような気がするんです、

本誌　いままでのお話を総合してみると、佐藤さんという人はだれが見てもまちがいなくやるべきことを非常にたんねんにかつ慎重にやったと言っていいのでしょうか。

■「官僚政治」と佐藤政権

中嶋　そうですね。たんねんに慎重に、さっきも言ったようにじみな形で時流に乗らずに、黙々とやったということでしょうかね。

ですから例えば庶民宰相として出発した田中さんと、いまの金権政治を批判されている田中さんとの間に、ものすごいギャップがありますね。そういうギャップは佐藤さんには意外に少なかった。それが、国民に目に見えないところで安心感、信頼感を与えていたんじゃないでしょうかね。

本誌　しかし官僚政治とか、待ちの政治とかずいぶん悪口はいわれましたね。

中嶋　確かにそうでしたけれども、実はそういう「官僚政治」が意外に六〇年代から七〇年代にかけての日本の社会の激しい変動には、適していたんじゃないかという気がしますね。こういう激動の時代に一国の宰相が一緒に息せききってマラソンしだすような政治家だったらもっとまずいことになっていたかしれもないと思うんですよ。

本誌　しかしどうして佐藤さんの実像は見えにくかったのですかね。

桶田　それは私どもスタッフの技術の拙劣さに責任があるんで、全く申しわけないといまでもほぞをかんでいるんです。（笑）

ただ確かに佐藤政権の実像は見えにくいという面はありましたけれども政治家にとって最も重要なことは実際にやったこと、あるいは実際にしゃべったことなんですね。国会演説とか、外交交渉とか、予算の決定とか、お米の値段の決定とか、新幹線をどこまで引くとか、そういうことはおおむね前面に出てるわけです。しかし出ているにもかかわらずみんな見ようとしない傾向がありますね。見ようとしないで、さっきおっしゃったような固定観念、官僚政治だとか待ちの政治とかそういう趣味、嗜好の問題で見てしまう。これは前面に出ているものが散文的でドラマチックでないということもあるのでしょうが……。それから日本の政治の実態はご承知のとおり、非常に優秀な官僚機構によって支えられてきましたね。これがあるからこそ戦後日本がこれだけ成長し、発展できた。しかし「官僚政治」という言葉は、何か全然そういうことは別な意味で使われているでしょう。そこのところに一つことばの使い方として矛盾があるんですね。

中嶋　そうですね。日本の官僚機構はほんとにある意味で優秀で、これだけ大規模な経済を動かして、たいした資源もないのにここまでやってきたのは、やはり官僚機構の大きな功績ですね。そして官僚機構はある意味ではほうっておいても、自動的にうまく回転していくという性格をもっていますね。

佐藤さんは外から官僚機構に、あまりインプットしなかったんじゃないでしょうか。田中さんの場合は官僚機構に強引にインプットしようとしたでしょう。列島改造という形で……。それが逆にマイナスになっちゃったんじゃないかな、そういう意味では佐藤さんは「官僚政治家」であるがゆえに、官僚機構の持つ重要性やその使い方におのずと気づいていたといえるかもしれませんね。

本誌　それではこのあたりで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。